

プレイングマネージャーの光と陰

Light and shade of playing manager

1K04A056-1

奥村 孝志

指導教員

主査 宮内孝知先生

副査 作野誠一先生

目的

本研究のテーマ設定は、今年度日本プロ野球界において、実に29年ぶりの選手兼任監督が誕生したことに起因する。選手兼任監督、通称「プレイングマネージャー」として東京ヤクルトスワローズを率いることになった古田敦也監督は、公私に渡り日本プロ野球界の一線で活躍して来た経験を持ちながらもその両立に苦しんだ。この事実を単に「監督業と選手業の兼務に手が回らなくなったことが原因である」と割り切ってしまうにはあまりにも早計であり、まだ我々の見解の及ばないところにその原因は潜んでいる。古田監督に限らず、プレイングマネージャーとしてスポーツの現場で結果を残すには、如何なる資質が求められ、またどのような手法をとることで達成され得るのかを明らかにすることが本研究の目的である。

方法

本研究を進めるにあたって、参考文献並びに先行研究の収集を行った。主な参考文献としては、プロスポーツ界におけるリーダーの自伝やその分析を記した書籍。さらに経営学、リーダーシップ、自己啓発を初めとするビジネス書籍を中心に考察を深めた。なお先行研究に関しては、スポーツ界におけるリーダーや、ビジネスの視点からみたプレイングマネージャーを題材とした研究を参考にした。プレイングマネージャーを考える上でのリーダーシップとマネジメントに関する文献、研究に関しては、実務的な内容のものよりも、理念や概念にこだわったものを選別し、より社会的な色を持たせるようにした。

結果、考察

本研究を進めて行く中で分かったことは、「選手兼任監督」という一見華やかに映るそのプレイスタイルも、現実にはプレイヤーとしての姿は影を潜め、チームのマネジメントに多くの労力を割かざるを得ないということである。プレイングマネージャーは、選手としての功績がベースとなり、その資質を期待された上で監督業をも任されるというケースが一般的ではあるが、これは必ずしも「名選手は名監督にあらず」という言葉の通り、その活躍が期待出来る保障は無い。よって、「選手兼任監督」としての組織運営のスタイルをしっかりとし身につける必要が出てくる。さらに、「選手とし

てはどういったプレイスタイルを貫くべきなのか」、また「監督としてはどのようなチームマネジメントを推進すべきなのか」を考えなければならない。

なお本研究は、今後スポーツ界において活躍を期待されるプレイングマネージャーに求められる資質、そして理想のあり方を提言することにも目的を置いている。プレイヤーとマネージャーの両立に苦しむという現実から、「如何にして兼業の負担を減らすか」がこの問題を解く鍵となる。ここで筆者が注目したのが、監督を取り巻くメンバー（フォロワー）の存在である。監督の脇を固めるコーチ、そして選手一人ひとりがリーダーシップを発揮出来るよう、選手としてではなく、監督の立場からチームマネジメントに着手する。これは兼任上、監督としての立場を維持出来ないような状況下においても自立的に状況判断が出来るフォロワーを育成することに主眼を置いている。選手として結果を残そうとする以上に、監督としてのチームビルディングを重視することが、結果的に兼業の負担を減らすことに繋がる。

結論

古田監督を初めとするプレイングマネージャーの理想的なプレイスタイルとは、チームマネジメントにメンバー（フォロワー）に対してのリーダーシップ養成を組み込んだ「メンバー育成型のマネジメントスタイル」である。要するに、監督を取り巻くメンバー一人ひとりが自立的に判断、行動出来るようなリーダーシップを植え付けていくということである。チームビルディングを行うに当たって、人材育成は切っても切り離せない要素となってくる。プレイングマネージャーは、監督、選手の両面から組織の運営に携わることが出来る。これによって現場の状況をダイレクトに感じ取ることが出来、より現状に見合った手段を投じることが可能となる。しかし、これを一人で処理しようとするのではなく、フォロワーを初めとしたメンバーの多くと、価値観、情報を共有し、より効率的な手段を考えていく必要がある。マネジメント主体にメンバーの育成に着手し、またそれに対しメンバー自身も監督の意志を積極的に汲み取ろうとするフォロワーシップの姿勢を常に意識しておくことが、互いの信頼関係を築き、チームの活性化を促すという結論に達した。